

2016年第63回応用物理学会春季学術講演会 特別シンポジウム
「応用物理分野で活躍する女性達 ー第4回 プラズマと応用技術編ー」開催報告

男女共同参画委員会
委員長 増田 淳

開催日時：2016年3月21日（月・祝）13:00～17:50
開催場所：東京工業大学 大岡山キャンパス（春季学術講演会 H101 会場）
参加人数：88名

1. 特別シンポジウム講演 プログラム（敬称略）

- | | | |
|-------------|--------------------------------|-----------------------------|
| 13:00-13:05 | はじめに | 増田 淳（産業技術総合研究所） |
| 13:05-13:15 | 会長あいさつ | 保立 和夫（応用物理学会会長） |
| 13:15-14:15 | 特別講演「物理／工学／フォトニクスにおける女性の活躍」 | 伊賀 健一（東京工業大学名誉教授） |
| 14:15-14:40 | プラズマを応用したポリマー表面処理技術とバイオデバイス創製 | 高井 まどか（東京大学） |
| 14:40-15:05 | プラズマ表面改質による生体材料の高機能化 | 大矢根 綾子（産業技術総合研究所） |
| 15:05-15:15 | 休憩 | |
| 15:15-15:40 | プラズマプロセスを用いたチタンおよびその合金の生体適合性向上 | 稗田 純子（東京工業大学） |
| 15:40-16:05 | プラズマ誘起気泡によるバイオメディカル応用 | 山西 陽子（芝浦工業大学／JST さきがけ） |
| 16:05-16:30 | DLTS法による半導体材料へのプラズマエッチングダメージ評価 | 竹内 和歌奈（名古屋大学） |
| 16:30-16:55 | 次世代電力機器開発に向けた高電界現象の理解とその制御 | 熊田 亜紀子（東京大学） |
| 16:55-17:00 | 休憩 | |
| 17:00-17:50 | パネルディスカッション | 司会：為近 恵美（NTTアドバンステクノロジー(株)） |

特別講演では伊賀先生より、面発光レーザの開発等、御自身の研究の歴史に関して、今回の特別シンポジウムのテーマであるプラズマ技術との関連も含めて御講演頂いた。男女共同参画に関しては、東京工業大学学長ならびに日本学術振興会理事の御経験も踏まえ、世界各国と比較した日本の現状や、女性研究者を増やすための各種施策が紹介された。女性研究者増加のための数値目標として、絶対値よりも微分値が重要で、継続的な取り組みが重要との指摘があった。女性研究者の活躍のためには、組織改革とともに、個々人の意識改革も重要との指摘もあった。講演後には会場から多くの質問が出て、予定時間を超過するほど、活況であった。

続いて行われた「プラズマと応用技術」に関する講演では、それぞれの演者にあらかじめ依頼をしておき、講演時間の後半の2～3分で、女性研究者という立場での話をして頂いた。その中では、女性研究者ならではの苦労や事情、家庭と研究を両立することの大変さ、研究活動を継続するために必要だった情報やしくみ、これまで得た支援やサービス・あればよかったと思う支援やサービス、自分の心がけや意識していること、これまでの経験で得られたこと、等が具体的に挙げられた。一方で、ほかの女性研究者の研究活動を支援するために活動していることについての話もあり、女性研究者がジェネレーションを超え、後進のロールモデルになりながら支援している様子がうかがわれた。一方、質疑応答では、企業でも大学でも短期間での成果が求められており、それに対してライフイベントが重なることが多い女性研究者は不利であるという意見が共有された。

2. パネルディスカッション

司会：為近 恵美（NTT アドバンステクノロジー(株)）

パネリスト：伊賀 健一（東京工業大学）、高井 まどか（東京大学）、中島 寛（NTT 物性科学基礎研究所）、根本 香絵（国立情報学研究所）

講演会会場にて設営を行い、引き続きパネルディスカッションを実施した。はじめに司会の為近氏より、今回のディスカッションのテーマ『男女が共に働きやすく、生きがいをもって活躍できる社会を実現するためにはどうしたらよいか』～ワークライフバランスの推進のために必要なこと～』についての趣旨説明があり、引き続き、今回講演を行わなかった2名のパネリスト（中島氏、根本氏）から最初の意見が述べられた。また、議論に先駆けて、このパネルディスカッションでは、企業の人事担当者など多くの方の忌憚のないご意見を伺うため、この場限りのディスカッションとし、個々の発言については記録をしないことを表明した。

これらを受けて、現在の日本における男女共同参画についての様々な議論が行われ、「女性の活躍はようやく点が線になった程度で、面に広げていく必要がある」「女性が働きやすい環境は男性にとっても働きやすい。男女ともに働きやすい職場にしてゆくためには、職場改革、意識改革が必要」などの意見が出された。また、会場からも意見・質問が相次ぎ、『評価制度』についてもオフレコを前提としたことで活発な議論がなされた。議論の中で、「評価のサイクルがライフサイクルに比べて短いため、女性研究者が評価してもらえない時期ができてしまう。論文以外の多様な評価軸が必要」「年齢に関係なくキャリアを精査して評価すべきである」「ブランクがあっても後から頑張れる制度、辞めなくても継続できる制度の整備が必要」「男女共同参画の推進のため各種委員等に女性を登用しようとすると、女性比率が少ないことから、特定の人に負担が集中する」など現状の課題も指摘された。

（3）まとめ

最後に司会から、女性研究者同士のネットワークの重要性について話があり、多様性に富んだ働き方が可能な社会の実現に向けた男女共同参画活動への期待が述べられた。



パネルディスカッションの様子